

第1節 今ヨコハマは

都市の中の主役たち

人生八〇年時代は、幼少年期から、全てのライフステージの生き方が問われており、特に、生活の場として重要な役割をになってきた「家族」や「地域」に対し、新たな意義づけを求めている。

人生80年時代の到来

市民の平均寿命が男75・5歳、女80・1歳（61年）となり、人生80年時代が到来した。そして、幼少年期から全ライフステージを通じて、生き方がとわれ、人生50年時代の健康、雇用

扶養、住宅、教育、余暇、家族、地域など、社会システムそのものの転換が求められている。

家族の変容

戦後の家族制度の改革にとまない、夫婦と子どものみの核家族世帯はいぜんとして多く、また、高齢者の単身世帯が増加している。さらに、家族構成員の自立化傾向が進み、女性の社会進出により家庭内の男女の役割分担も変化しつつある。

家族は古来、生産の単位であり、同時に相互扶助の単位であり、教育の単位でもあった。しかし今や、生産は職場へ、福祉は施設へ、教育は学校・塾へと、家族がはたしてきた機能は、ますます外部へ委譲されている。

人生80年時代を迎え、家族はいかなる機能をはたしていくのだろうか。

都市の主役たちが抱える課題

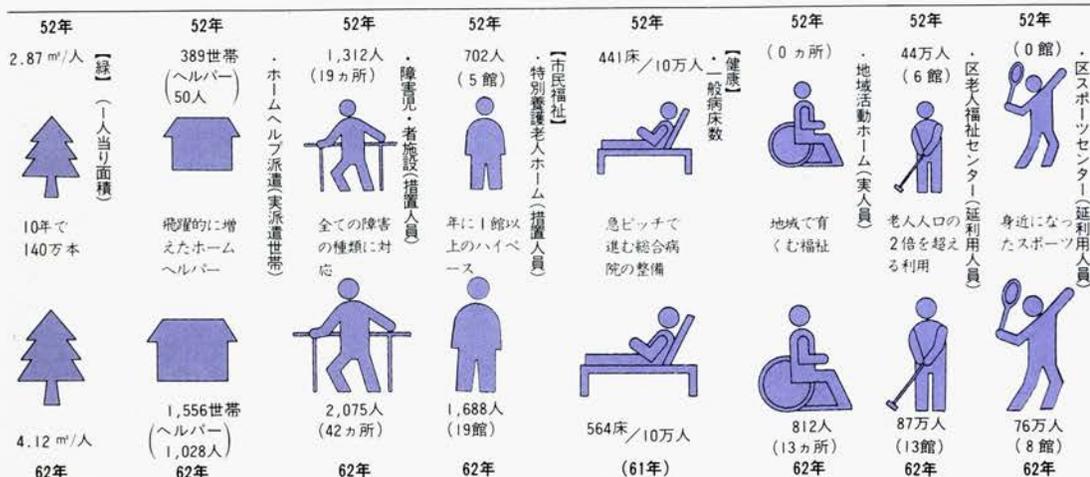
子どもたちは高学歴社会の中で、中学生の約半数が塾通いと、自由に遊ぶ時間をうばわれている。都市化の進展は、遊び場を自由な空間から家の中・公園などの管理空間へと移行させ、子どもたちから自然との体験をうばってきた。

家族や地域、そして都市は、子どもたちに自由創造、発見の喜びをあたえてくれるのだろうか。大人たちは本格的な余暇時代を迎え、学習、文化、スポーツなど、多様な活動を展開し始めている。地域は、これを契機としたさまざまな

ネットワーク形成の場となりうるのであろうか。高齢者は、人生80年時代をむかえ「みずから生活する」、すなわち自立を求めている。それは「健康」(医)「生計」(職)「生きがい」(充)の

すべてが満足されなければならない。家族や地域、そして都市は、高齢者の第二の人生をじゅうぶん支えてくれるのだろうか。

障害者は健康者とともに生活し、喜びや哀しみをともに分かちあうことを求めている。福祉ボランティアがそだち始めているなかで、地域は人びとにとって、ふれあいの場になりうるのであろうか。



Yokohama



活力ある高齢化社会…。知縁社会の到来は、高齢者の知識と経験
を必要としている



海外へと広がる友達の輪…若者同士の心のふれあいは、国際平和の実現をよ
り確実なものにしていくであろう



日常生活の中の福祉…福祉は決して大げさなものではない。ちょ
っとした心づかいに私たちの心はなごむ



地域に還る大人たち…肩にひびくみこしの重みとかけ声が、知らない者
同士をいつの間にか結びつけていく

